

家庭科教育と生活文化

平 井 聖

家庭科の教科書を、改めて開いてみて驚いた。始めから終わりまで、HOW TO ものの連続である。衣食住を始め多くの分野ごとに、今日すぐ役に立つような生活技術満載である。意地の悪い見方をすれば、特に衣と食を専門となさる偉い先生方が、自分の分野の存在を主張し、少しも減らされまいとして、頑張りあっているといった印象である。後発の住居など、申し訳程度にしか、頁が割り当てられていない。

普通科なら、一般にどの教科でも、もっと基本的な考え方を学ぶのが中心で、技術教育を目的とする工業科でも、最近では先端技術について教える一方で、技術の成り立ちや、人間との係わりについての知識を教えることの必要性が、認識されるようになってきている。教科としての家庭科の場合でも、生活文化の具体例として、総合的に取り上げ、考えさせることが必要だと思う。

ところで、日常の作法の一つである、玄関を上がる時の履き物の脱ぎ方、を取り上げてみよう。玄関だけでなく、特に公共的な所での便所のスリッパなど、脱ぎっぱなしは目に余る(図1)。脱ぎっぱなしが自然なのかも知れないとすら思える状況であるが、それでは一体何時から履き物を次に履くための揃えるようになったのか、という疑問が浮かんでくる。どなたか研究をなさっているのなら、教えていただきたい。

履き物の揃え方について私なりに考えてみると、上がる時に次に履くための履き物を反対向きに揃えるのなら、上がる時はそのままにして、履くと

きに反対向きに直してから履いても、手数は同じである。

縁先の沓脱ぎ石の上や玄関の式台の前に脱いだ履き物の様子を絵巻等で追ってみると、中世の高僧の伝記絵巻でも、下駄や草履が脱ぎっぱなしで揃っていないか、ひっくりかえっていたりする。揃っていても、上がるときそのままの爪先を建物の方に向けた揃え方である。

踵の方を建物の方に向けた、履くときのための揃え方も見られないわけではないが、少数派のようである。お供がいるときにそのような状況が見られるような気がするから、主人が上がった後で、お供が直したのであろうか。絵巻史料をちゃんと調べたわけではないので正確なことはいえないが、これ迄他の目的で絵巻を見てきての印象である。

一步推測を進めると、他人の家を訪れたときに、そのままの向きで揃えて上がったとすると、訪問先の人気が使って、履き易いように向きを変えて揃え直すということになるので、そのような気遣いをさせないように、上がる時に反対向きにする習慣が生まれたということも考えられよう。いずれにしても、玄関先の履き物の作法は、早くても江戸時代、一般に広まったのは明治以降ということになりそうである。このような見方が当たっているかどうかかわからないが、そうだとすれば自分の家では見苦しくなければいいので、どちら向きでも揃ってさえいればいいということになりそうである。

このような躰は、家庭では物心つく前から実践的に躰るのなら理屈抜きでもできるが、学校ではそう簡単にはいかないだろう。そのようなとき、先生が確実な答を持っていなくても、児童・生徒あるいは学生達と一緒に調べ、考えるのがいいのではないだろうか。

玄関一つ取り上げても、履き物のほかにも、日本では家の出入口はどのように変化してきたか、出入口の名称はどのように変わってきたか、よその国では家の入口はどのようになっているか、世界中のどのような国に履き物を脱ぐ習慣があるのかなど、いくらでも話

HIRAI-Kiyosi 昭和女子大学教授(生活機構研究科)

著者紹介〔略歴〕昭和27年東京工業大学卒業(建築第一課程)。昭和27年～平成2年東京工業大学に在職(助手、昭和40年助教授、昭和49年教授)。この間昭和58年1月～昭和63年12月付属工業高等学校長を併任。平成2年～現職。工学博士、東京工業大学名誉教授、放送大学客員教授、金沢市立美術工芸大学非常勤講師。文化財保護審議会委員。〔専門分野〕日本住生活史。〔連絡先〕〒154 東京都世田谷区太子堂1-7(勤務先)。

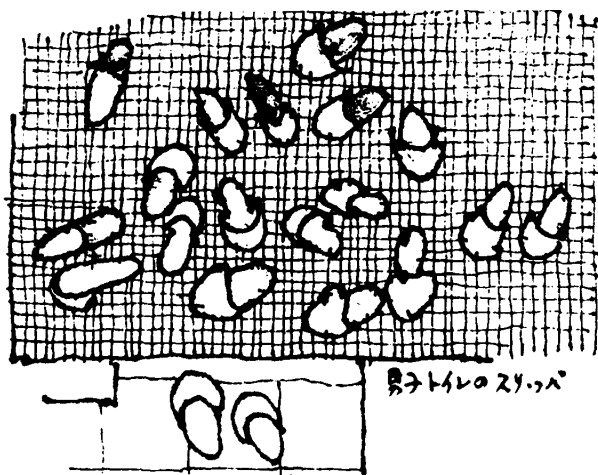


図1. トイレのスリッパは、はじめ揃っていたのに
たちまちめちゃくちゃ

入る時はいて来たスリッパをきちんと揃えておくとは別人が出て来て揃っているのはいて行ってしまふ。揃っている方が履きやすい事は知っているのだ!

題はあるだろう。教えるのではなく、一緒に考えることこそ、大切なのだと思う。

続いて、食の分野に触れてみたい。食といっても、食品や料理のことではない。食べ方や食のための器具、そして食事のための部屋についてである。まず、箸。現在の日本の箸は、先が細く、持つほうに向かって次第に太くなる。日本の箸とかかわりのある箸の文化圏をみると、例えば中国では全体的に太く長いし、韓国では細く短い。材料も、それぞれ違っている。そして、中国・韓国では、箸だけではなくスプーンも使う。日本でも平城京などで発掘される箸は全体的に細いし、正倉院には韓国の現在のものとよく似た形のスプーンが伝えられている。現在の箸の形がどこまでさかのぼれるか、日本ではなぜスプーンを使わないのかなどなど、私の好奇心をそそり、学生達と話し合いたい問題は沢山ある。

また、箸を使うテクニックを年齢と共に学習する過程も他国と比較して調べてみたい課題だし、一般的に通用している箸の持ち方が何故正しいのかを確かめるための、色々な箸の持ち方の代表をだして、合理性、機能性などを比較する実験など、興味は尽きない。

このごろは色々な国からの児童・生徒・学生を受け入れているし、その親達もいる。海外生活の経験のある親や子供も、増えている。したがって、外国との比較を教室の中で取り上げることも、不可能ではなからう。

更に、日本の食事風景の変化を追ってみても、畳の部屋で座って食事をする習慣、椅子とテーブルで食事をする習慣が現在行われている一方で、場合によっては銘々の膳で食事をする習慣も残っている。これらの生活習慣がどのように使い分けられているか、どのような順序で変化してきたか、変化にはどのような理由があったのか等課題は幾らでもある。この三種の食事形式の変化には家族観の変化が深く係わっているから、話題は更に広がることになる。

また、食事形式の変化は食事をする部屋にも係わり、その部屋の家の中での重要性も変わってくるから、住居の問題でもある。食の分野と断って取り上げたが、問題が発展するにつれて、料理のほうにも、家族観にも、住居にも関係がでてくる。作法にも広がるであろう。

何一つとっても、その分野だけで終わることはない。総合的にみることこそ、家庭科の内容を豊かにする鍵だと思う。

最近では、リサイクルが、盛んに話題になっている。空き缶、ペットボトル、牛乳パックの回収。ガレージセール。ガレージセールの会場には、中古品、不用な新品等が並び、大いににぎわっている。更に、ガラクタ市、骨董市が大々的に、定期的に開かれている。古いものが売れる、使った衣類でももう一度使ってもらえるという観念が定着しつつある。他人が使っていたコーヒーカップ、手を通した衣服等に対する、何となく気持ちが悪い、貧乏くさい等という意識が薄くなっている。

江戸時代には、庶民でも侍でも、衣服の仕立て直し、染め直しは当然の事であった。古着商は、町の重要な商売の一つであった。布は、ボロになっても、最後は紙の原料にと、回収されている。紙ももちろん回収されて、漉き直された。昔から公に使われる立派な紙でも、白くなくグレーのものが、しばしば使われている。いらなくなった墨書きの文字のある紙が漉き直され、回を重ねるごとにグレーが濃くなったのである。

敗戦後否応なしに押し付けられているアメリカの生活習慣や生活技術によって、日本の生活文化が歪められている。省エネルギー、省資源は、日本の文化の基本であったはずであるが、戦後入ってきた大量生産大量消費の生活習慣に霞んでしまった。例えば衣の分野では、伝統的なリサイクルの思想をふまえて、不用な衣類の再生や繕いの技術について教えてほしいものである。時代によって背景に違いがあるとしても、資源

を大切にすることは、生活の基本である。そんなことに子供達は興味を持つはずがない、そんなことと笑っている読者の顔が見えるような気がするが、そのような人こそ明日のギリギリにならないように、心掛けてほりいものである。

家庭科教員の理想像として、どのような家事も人並み（以上）に出来、人の手本になるような、聖人・君子的な条件が語られることが多い。そこまでいかなくても、あるレベルでの生活技術万能ということが求められているようである。それに対して、このシリーズの企画説明の座談会でも、一つの分野に深い知識を持った人の家庭科教員としての有用性が、話題になっている。浅く広くになりがちな家庭科の授業の中で、どこか一つでいいから突っ込んだ授業が出来ればということなのであろう。確かに、このことは家庭科の授業を豊かにするための必要条件の一つとして、考えるべきことであらう。

しかし、私は家庭科教員に、まずは普通の常識を備

えた上で、常識外れの行動ができる人、常識を知っていて理由があれば外すことのできる人であってほしいと思う。その上で、何事にも、あるいは少なくとも必要と思った事に、興味を持って調べて見ようとする、好奇心のある人であってほしいのである。

このことは、家庭科の教員に限らずどの分野についても何時も言われることであるが、家庭科のように広い分野をカバーするには、何にでも興味を持てる人という資質が、最も大切なのではないかと思う。そうでないと、授業が目目の現実の技術とその有用性の科学的な裏付けに終始してしまい、現在の生活文化のよってきたるところに目が向かなくなる。これ迄の過程に関心が無いということは、連続して変化していく将来を見通す目も持っていないということなのである。生活文化の本質を見極めようと心掛け、過去にも現在にも興味をもって対応できる人であってこそ、家庭科教育を豊かにする事が出来るのだと思う。